

### 「四国で一羽の蝶々がはばたくと、世界でハリケーンが生じる」 ～情熱と意志を持って～



講師  
早稲田大学マニフェスト研究所顧問  
元三重県知事

北川 正恭

#### プロフィール

##### 【略歴】

きたがわ まさやす / 1944年生まれ、三重県出身。67年早稲田大学第一商学部卒。72年三重県議会議員当選(3期連続)、83年衆議院議員当選(4期連続)。95年三重県知事当選(2期連続)、2003年4月任期満了で退任し、早稲田大学大学院公共経営研究科(現同大学公共経営大学院)教授に就任。15年3月同退任。この間、08年「地域・生活者起点で日本を洗濯(選択)する国民運動」(略称=せんたく)を立ち上げ、代表を務める。09年政権交代後、せんたくの活動を終了。同年12月地方分権を進める政府の地域主権戦略会議の構成員に就任。以後、相馬市復興会議顧問、長野県政策研究所チーフアドバイザー、熊本市復興アドバイザー等。

##### 【プロフィール】

政権公約(マニフェスト)による政権選択選挙、地域・生活者の視点に立つ地方分権改革、国民意識の変革などにより、政治を変え、日本を変える提言、運動を推進している。改革派知事として、「生活者起点」を掲げ、ゼロベースで評価する「事務事業評価システム」の導入、積極的な情報公開、達成目標、手段、財源を住民に約束する「マニフェスト」の提言などを進め、国に「依存」する地方から「自立」「主張」する地方へ、地方から日本を変える変革者の旗手として活躍。

##### 【主な著書】

「マニフェスト進化論—地域から始まる第二の民権運動」(生産性出版)、  
「マニフェスト革命—自立した地方政府をつくるために」、「生活者起点の『行政革命』」(以上、ぎょうせい)、「行政経営改革入門—経営品質の活用と地域経営」(共著、生産性出版)、「地方から日本を変える 改革派知事が語る新しい民主主義の実践」(共著、北海道大学高等法政教育研究センター)、「知事が日本を変える」(共著、文春新書)など

(2017年2月現在)

四国全体のロータリー地区大会ということで、大変ご苦勞いただいたと思いますが、みなさん方が頑張っている地域を引っ張っていただければ、地域が元気になると思います。

私の今日のタイトルは「四国で一羽の蝶々がはばたくと、世界でハリケーンが生じる」という、とても変わったタイトルですが、蝶々が1羽飛んでいました。それを隣で見ていた蝶々が、私も飛ぼうということで、1羽が2羽、2羽が4羽、4羽が8羽、8羽が16羽というふうに広がって、全部の池に蝶々のさざ波がたつたという例え話です。

今日はみなさんに1羽の蝶々になっていただき、みなさんの組織で会社で地域で、羽ばたいていただいたら、連鎖反応が起きて会社のシステムが変わったとか、雰囲気が変わったなど、そんな話をしてみたいと思います。

お隣の徳島県の上勝町は、彩(いろどり)という葉っぱビジネスで有名なところですが、その村で起こったことを例えに、蝶々の話をしてみたいと思います。

上勝町は四国山脈の山の町ですが、自動車や電化製品を売らなければならないので、それと引き換えに日本政府が木材の自由化をしたため、材木

の値段が下がり、どうにもたちゆかなくなりました。最盛期には6,700人の人口が林業の衰退であつというまに2,000人になり、このままでは限界集落や消滅集落は免れないような状態に陥りました。町当局も頑張って、国や県に陳情に行き、農林省や林業関係の補助金を貰おうと努力をしましたが、事態は好転しませんでした。

そんなとき、JA職員の横石さんという方が、このままでは上勝は潰れてしまう。どこかで飯のタネを、みんなが食べる食いつ持たなければと、高い志を持って、何かないかと、日本中を探し回りました。大阪でたまたま入った食堂で、前に座っていた若い2人の女性が、食事を終わって立ち上がったとき、「この葉っぱきれいだからもらっていい」と、お皿の葉っぱをハンカチに包みましました。それを見ていた横石さんは、あっ、そうだ葉っぱだ、葉っぱを売ろうと気づいたそうです。

ところで学習と気づきの違いはご存じですか。学習は小学校に入ったときに、先生から1+1=2ですよとか、2×2=4ですよと教えられて覚えていくイメージだと思いますが、横石さんは何とか飯のタネをとという志を持っていたので、彼女たちの様子を見て、そうだ葉っぱを売ろうとハッと気づいたわけです。主体的、自発的、内発的に“さあ、やろう”とモチベーションが変わることです。

“そうだ！葉っぱを売ろう”と思い、上勝の町へ帰り、町長さんや議長さん、商工会の会頭さん、JAの組合長さん、自治会長さん等々の指導者の前で、若い横石さんが「僕は大阪でこんなことを見てきました。葉っぱなら四国山脈のど真ん中の上勝にはいっぱいあります。だから葉っぱを売らしましょう」と言ったそうです。すると町のみなさんは、「お前、バカと違うか。葉っぱがお金に化けるのはタヌキの話や。何を考えてる」と笑いました。これが全国の町長さんや市長さんや、商工会議所の会頭さんなど、今まで成功してきた多くの人の考え方です。

でも横石さんは、何とかしようと必死でしたが、

今までの常識では考えられないことでした。だから、それはタヌキの話だというわけです。たしかに、そういう考えが一般的だったと思います。そんなときに助けてくれたのが女性たちです。80歳の4人の女性が、「あらっ、横ちゃんかわいそうに、いじめられてるわ」「葉っぱなら軽いから、私たちが仕事ができるかもわからんね、横ちゃんを助けてあげよう」ということで、横石さんたちはそれから4年間努力して、4人で100万円を売り上げました。売り上げは僅かですが、葉っぱはお金になると気づきました。それからです。みんなが一生懸命に取り組むようになりました。やがて、年収1,000万の女性たちが続々と出てきました。おそらく、横石さんがいなければ葉っぱビジネスは誕生しなかったはずですが、横石さんが、北京の蝶々になったのか、葉っぱが蝶々になってパーッと広がり、上勝の町が変わり始めたのかもしれない。

私は上勝に行ったことがあります。そのとき彼は道端の柿木を示し、この柿木は何に価値があると思いますかと私に尋ねました。私は、当然柿の実でしょうと答えました。すると彼は、柿の実ではなく、葉っぱだと、そして柿木1本で1シーズンに20万円を稼ぐと教えられました。柿の葉っぱがお金になることを彼に気づかされ、私は2匹目の蝶々になったということです。また彼は、ここは暖かくてあまり風が吹かないので柿木の葉っぱの色は緑と黒と赤のコントラストがはっきりしていて、とても欲ばれるので価値があります。でも京都の料理屋さんにはうるさい人がいて、こういったはっきりした色よりもくすんだ色の葉っぱのほうが良いという人がいます。だから、山の裏側の寒い場所の柿木はくすんだ色の葉っぱなので、そこはこことは違う別の人がやっています。

だからだんだんと進化していくことになるわけです。そんな話もしてくれました。

「横石さん、私、三重県に帰って真似してもいいですか」と聞くと、彼は「どうぞ」とあっさりしたものです。みんな同じことを言いますが、今まで

成功したことはありません。だからどうぞと言うわけです。

上勝町は現在、1,800人の町ですが、そんな小さな町の葉っぱビジネスが日本の市場、マーケットの80パーセントを押さえています。立ち位置が変わって、自分たちで気づいて決意し、断固やろうとなると、1,800人の町が日本の葉っぱの市場の80パーセントを占めたわけです。

ところで、町の女性たちの趣味は、パソコンです。理由は、瞬時に動く市場に対応するためですが、現在の彼女たちは 아이폰 を使いこなすそうです。彼女たちは葉っぱビジネスを通じて競争の原理を理解し、生きがいを感じました。お陰で認知症の心配もありません。

彼女たちには、年間1,000万円の稼ぎがあるので、息子や娘たちに遠慮しながらの人生ではなく、孫にもお小遣いをあげられますし、場合によっては息子を助けるなど、社会の存在感があります。横石さんに、「北川さん、政治家長いんでしょ。それなのに一体何をしていたんですか。お年寄りが元気で稼いで、社会に存在感があって、孫の面倒がみれるのが、ほんとの社会福祉政策ですよ」と言われ、私は「すみません」と頭を下げました。要するに考え方です。今まさに、我々はそれを考えなければなりません。それが葉っぱビジネスで見えてきました。

ところで、横石さんの葉っぱを売ろうの発想をバカと違うかと笑った町長さんが、民間の横石君があんなに頑張っているんだから、役場も変わらないといけないという発想の転換をしました。日本の全国の市町村は、どちらかという管理をしようということで、税金を取る側、規制をかける側です。それが仕事です。そうでなければ世の中の公平性は担保されませんから、それが仕事だと思いついてきたところがあります。そういう思い込み、固定観念、先入観のことを英語でドミナント・ロジック (dominant logic) と言います。要するに、もうこんなもんだと、上勝の役場はこんなも

んだと、町長さんも思われていたのが、横石さんの立ち位置を変えた発想で、2匹目の蝶々に町長がなったわけです。

町長がこれは負けておれない。役場も変わろう。今まで役場は許認可の発行所でした。あるいは予算の分配業でした。日本は701年の大宝の律令以来、律と令の国です。世界で最も立派な官僚体制ができあがったところです。官が頑張ってきたから日本の今日があるという、立派な仕事ぶりでした。

水戸黄門のテレビドラマが好きな人はたくさんいます。天下の副将軍が「こらお前たち、頭が高い。米俵の上に座るとは何事だ。ひれ伏せい」と言い、そして、「お前とお前とお前、それぞれが悪いから三方一両損だ」と、言います。法律に基づいているから勝手なことをするというのが本当はありますが、天下の副将軍ですから、自分で勝手に決められるわけで、悪いのは「こらっ、越後屋」です。民間人が悪いわけです。越後屋は最も悪いですね。越後屋は三井、三越のもとで、三重県が発祥の地です。こんなふうに、日本人はお上のほうが正しいとみんな思い込んできました。だから、水戸黄門が正しくて、みなさんが悪者になってきたという日本の歴史があります。遠山金四郎も、「この刺青が見えないか。こら越後屋」です。

日本の官吏は優秀ですが、やはり守るほう、管理する側のだから、いわゆる上勝の役場も管理をしようと思ひ、みなさんが予算を何とかくださいと陳情したら、何と市役所の選挙もしない部長や課長程度が査定するわけです。例えば、お前の言っていることはまずいからやめとか、お前の言っていることはいいからと、差別用語ですが、お上のほうが高いわけです。でもみんなそんなものだと思いついてるので、何の違和感もなくドミナント・ロジック (dominant logic) で受け付けてきたわけです。でもヨーロッパやアメリカでは、スーパースターは正義の味方で、ロビンフッドやウィリアムテルなど、民間の人々が悪い代官を

やっつけるというのが、民主主義、民が中心ということなんです。

日本は官があまりにも立派すぎて、庶民がなかなか育たなかったという状況から、町長さんも民間の横石君があんなに頑張ってくれているのだから、自分たちも頑張って、町民を管理するよりは経営をしながら、お互いがウイン・ウイン (win win) の関係で、仲良くしたほうが良いということ、50人しかいない役場の職員が、5地区に分かれ、それぞれの地区の良いところと悪いところを徹底的に町民のみなさんと調査しました。どこかに金儲けの材料のお宝は眠っていないか。どこかに子どもが怪我をするようなハザード、危険な場所はないか等々、徹底的に行ないました。ところが、山奥の町ですから、お宝の材料はそう多くは落ちていません。町長さんは、葉っぱがお金になるなら、何かお金になるはずだと考え抜いた末に、「そうだ一利一害の法則が世の中にはあった」と。一利とは、1つの儲けをするため、利益を得るためには、一生懸命頑張っているところを伸ばし、利益を得る方法と、もう1つは悪いところ、一害を取り除いて上手く回転すれば儲かるという、一利一害の法則で、一利を得るは一害を除くに如かずの例え話を思い出して、「そうだ、我々はまだゴミを出しているからゴミの分別をやろう」と、ゴミに気が付きました。

そこでゴミを徹底的に分類しました。その結果、現在、上勝町では34分別です。みなさんの市町で調べてみてください。上勝は小さい町だからできるかもしれませんが、やる気になったからできたわけです。34分別の結果、町のゴミの80パーセントが減少しました。町長さんは、ゴミは減ったけれども、出るゴミの量は変わらない。それなら出るゴミをゼロにしようと考え、ゼロエミッション運動に進化し、出た生ゴミは農家の田畑に還すコンポストを置き、本気で取り組みました。大型ゴミは徳島県と連携し、どうしても処理できないゴミはセンターに持って来てもらうよう、クルクル

センターを設置しました。これはリサイクルセンターですが、例えば町の人たちは使わなくなったランドセルなどが持ち込まれると修理をして他の子どもに回します。このようにゴミとリサイクル商品が来るからクルクルセンターというわけで、町内で経済を回していく形になりました。小さな町ですが、2台のゴミ運搬車がかつてはありましたが、それもなくなりました。カラス対策としてゴミの集積場に網をかけていましたが、そこもなくなりました。結局、公のお金を使わなくなれば税金が安くなるので、可処分所得が増えるという考え方で、どんどん変化していきました。役場は管理するところではなく、みんなで町をつくっていくというのが民が主力の民主主義です。

今までは官主義で、商売のできない人が役場の職員ですから、地方の経済ができるわけがないのですが、なぜだか商工会議所は市役所の商工課や県を頼ります。でもアベレージなので官がやって成功したことはほとんどありません。官は税金でやっているのだから、公平平等です。みなさんは違います。人とは違うことに気づき、勇気をもって挑戦しなければ、経済が成り立ちません。みんなが官に頼った結果、四国はどういう状態になったかということです。

私もかつて知事でしたが、官は法律に縛られ、公平平等です。横石は官ができないことをやって、官の仕事のやり方を変えました。自分たちでやろう。葉っぱをお金に変えよう。ということで、葉っぱビジネスを立ち上げましたが、競走に勝つために全国のモデル事業としてマイクロソフトが回線を無料で敷いたので、日本中が注目しました。

葉っぱビジネスは、横石さんという蝶々がほんとうの町長を蝶々にして、町民全体が蝶々になり、国や県に頼るだけだった町民から、自分たちで気が付いてやっていくという町ができました。このように、3,300人のロータリアンの方が、それぞれの地域や町や県で、またそれぞれの企業で、それぞれのご家族で思い切り羽ばたけば、あっとい

## 本会議 (大会第2日目)

うまに四国は変わります。全体が変わらなければ、なかなか変わりません。上勝も人口が増えなくていまだに苦勞しています。日本中が注目し、元気になりましたが、国全体の体制、四国の体制、徳島県全体の体制が変わらないので苦勞していますが、上勝が徳島県内全体に行き渡り、徳島県が変われば、北京の蝶々、四国の蝶々ということで、上勝が変われば徳島が変わり、徳島が変われば四国が変わり、そして中国全体が、そして日本が変わるということを、地域のリーダーのみなさん方の集まりであるロータリアンのみなさんがやっただけならば、ほんとうにこの国は大きく変わる時期を迎えているとわかっていただけたら有り難いと思います。

社会の変化は、安定期と激動期の繰り返して成り立っています。今から72年前に、日本は負けました。敗戦です。300万人以上の日本人が戦争で殺されました。日本中の140の地方都市が無差別で爆撃に遭い、灰燼に帰して山と川しか残りませんでした。政治の大失敗です。

総理大臣になられた吉田茂さんは高知県の出身ですが、彼は大変なことをした。国民にお腹いっぱいのご飯を食べてもらうことが政治の一番の目的であると、灰燼に帰した焼け野原で責任者のひとりとして、吉田さんは考えました。そこで彼は、国民にお腹いっぱいのご飯を食べさせるために経済を中心にやっただけ。ただし、戦争でお金が無くなり予算が組めない。それなら、日本のそれまでの一番の金食い虫の軍隊を無くそうと考えました。我々の親は、末は博士か大臣か、陸軍大将か海軍大将という、最も凄い立場の軍隊を無くすということを目的のために、価値を追求するために吉田さんは断固廃止しました。このことを価値前提の経営といいます。目的のため、お腹いっぱいのご飯を食べるためには軍隊を潰すという決意がなければ、背後はスタートしなかったと思います。

そんなこと言っても軍隊を無くしたら、外国から攻められたら日本はどうなるんだということ

で、アメリカと単独講和か日米安保か、または日ソの安保か、あるいは全面講和で世界中と仲良くするか、スイスのような永世中立国になるか、吉田さんは考え抜き、日米安保条約を結びました。それがよかったかどうか、いろんな方がいるので批判はあると思いますが、私は吉田さんが断固として日米安保を選んだので、今日の平和や豊かさがあるのではないかと評価しています。軍隊が無くなっていなければ戦後の復活はなかったと思います。

72年前、女性の人権はありませんでした。参政権があったのは男性だけでした。投票の権利がない男社会でずっときていたのですが、天皇の人間宣言と男女平等で、女性が参政権を得られたのがわずか72年前のことです。今日のロータリークラブも8割ぐらいが男性の方なので、5分5分にならないと、ということだろうと思います。

日本には地主と小作がいる。地主はいいけれど小作は奴隷のようだ。日本を再び戦争するような国にしないためには、人々が民主的な生活を送れるように農地解放をやらなければならない。タバコ1箱と1アールの田んぼを交換しろと、強制的に命令して、地主を泣かせて農地解放が行なわれ、全国津々浦々の我々世代はみんな、高校や大学に行けるようになりました。

意義のある農地解放ですが、全国一律だったために、産業だった農業が家業に変わり、非生産的になり、70年経った今、就農年齢が70歳ぐらいになり、競争力がほとんど消失してしまい、TPPのお世話になるかどうかの大変化が起きてきました。かつてはよかった政策でも、どこかでもう一度、立ち位置を変えて見直さなければならないことが、農業の世界でも起こってきています。

また、18歳、19歳の人権が認められ、選挙権ができました。このようにいろんなことがどんどん変わる時代を迎えています。

吉田さんや岸さんは安保条約を結びましたが、その後15年間ほどは何十万人という学生が国会を

取り巻くという、国家が潰れるか潰れないかの経験もして、東京大学の女子学生の樺美智子さんがデモで圧死するという悲惨な事件があり、15年で2回目の安保条約の改定が通り、何とか少し落ち着いてきたとき、戦後15年の1960年、今度は池田隼人さんが内閣総理大臣になりました。池田さんは、“私のキャッチフレーズは寛容と忍耐です。低姿勢でございます”ということで、吉田さんと岸さんが築いたルールに乗って、これからは経済でいきますということでした。いろんな経緯の中で基礎が築かれていたので、池田さんは寛容と忍耐で経済第一でいけたわけです。10年間でみなさんの国民所得は倍増しますという、こうして池田さんは、有名な所得倍増計画を打ち立て、何と7年間で国民の生活を豊かにしました。これが自民党の今日の基礎を築いたといえます。

井沢八郎の「ああ、上野駅」、集団就職、金の卵、ご存じですか。私は早稲田大学で学生を教えますが、学生は誰もこの言葉を知りません。過去のことです。東北の貧しい一次産業の農家のみなさんの子どもさんが、中学を出た15歳で、男の子も女の子も集団就職で上京。着いた駅が心の故郷上野駅です。当時は演歌が流行っていました。演歌歌手井沢八郎が一生懸命に歌った心の故郷の駅、集団就職、金の卵です。みんなが集団就職で頑張ろうという時代でした。圧倒的に生産が優先のときでした。高度経済成長のために、東北や四国などから、四大工業地帯にどんどん働き手を出していました。

吉田さんや岸さんは過去と断絶して革命を起こしましたが、池田さんは過去と継続しながら、彼らの土台をもっと機能的に上手く回転させていこうとしました。こういう経営の方法を事実前提の経営といいます。吉田さんと岸さんは価値前提の経営です。目的のために、過去の既得権益はばっさり切ります。軍隊も切ってもやるということですから、革命です。この考え方の根本思想は断絶です。過去はそのまま、軍隊もそのままであれ

ば、経済成長はありませんでした。断絶したからこそ、戦後がスタートすることができたわけです。

そういう制度ができあがってきたときに、池田さんはその制度を十分に活用しようと、革命から言葉が改革に変わりました。今ある体制をそのまま継承する事実前提の経営です。この経営の天才が池田隼人さんです。

“よしっ、工業国家をもっと促進していこう”当時の合計特殊出生率は4.5人だったので、子どもが多く、労働力はあり余るという前提で工業地帯を造り、四大工業地帯を造っても労働力がありませんでした。当時は固定相場制だったので、1ドルが360円でした。池田さんはそれをわかった上で、製造業中心の工業国家を目指しました。

こうして制度全体を整えましたが、親にしてみれば15歳のわが子を都会や工業地帯に出すことはとても不安です。そこで池田さんは世界一の健康保険制度を設け、定年退職後の年金を整備しました。健康保険も年金も制度ができたことはとてもよかったのですが、例えば私ども夫婦の会話は、病気の話が中心です。そんなわけですから、国民全体の医療費が無限に重なっていく状態が続いています。子どもが4.5人生れてきたときは15歳から64歳の年代が圧倒的に多く、年寄りの方が少なかったので、20人にひとりが老人を支えていました。子どもから5パーセントを出してもらえば、健康保険や年金は可能なのできちんと機能していましたが、今はどうでしょう。3人に1人が、やがて2人に1人、そして1.1人に1人の老人を抱えなければならなくなると、年金制度も健康保険、消費税も税金も根本的に改めなければ絶対に世の中は成り立ちませんが、政治はポピリズムなので、国は国民のみなさんから税金を取るとはいえないので、代わりに国が借金をして、いまやその額は1千兆円です。

世の中が成長社会から成熟社会、年寄り社会になったのだから抜本的に国や地方の経済の体制を変えなければなりません。そのためにどこかの部

分で昨日と断絶して新しい時代をつくらなければならぬのが現在の時代です。安定期を過ぎ、いよいよ激動期を迎えたのではないかというのが今日の話の前提です。激動期になればなるほど、過去と断絶し、新しい価値前提の経営が求められるのではないかと思います。

わが家で断絶が起きました。5歳の孫がいますが、孫の誕生日に妻が孫に「おめでとう。ハッピーバースデー」と言いました。そしたら孫が「ばあちゃん、ちがう」と言うのです。何が違うのか不思議でした。聞くと、英語の発音が違うと言うわけです。我々の時代は英語の話ができない英語の先生に教えられたので、和製英語です。これが正しいと思い込んでいました。でも5歳の孫は幼稚園でネイティブな外人に教えてもらっているのです。発音が違うわけです。思い込みは恐ろしいことです。家庭教育はおじいさんやおばあさんが孫に教えたり、パパやママが子どもに教えるものと思い込んできたのですが、わが家では、孫が教えています。時代は変わりました。今までは、学校や社会で教えてもらわないことを、両親や祖父母が教えました。これが家庭教育だと思ってきましたが、社会構造が大きく変わりました。

日常の努力として、人間たるものは何かを教える必要があったとしても、それは当然ですが、電子関係やIT関係は子が親に教える時代です。このことを、私世代は本気で考えなければいけないと思います。

私は1983年、今から30数年前に国会議員になりました。国会議員になった以上は勉強をしなければと、『ニューメディア』という本を買いました。それを見た先輩が、「そんな古い本は捨てろ。これはマルチメディアだ」というわけです。それで『マルチメディア』の本を読んでいたら、内閣総理大臣が、「そういうことは古い、これからはイット革命だ」と言うので、「イット」で何だろうと思ったら、「IT」のことでした。失礼なので名前は出しませんが、オリンピック関係者である内閣総理大臣

が間違ふほどの場代の大変革が起きたことをどうぞ理解してください。紙の文化ではなく、双方向にインタラクティブに情報は飛び交って、時間と空間を全く無くしました。

北朝鮮がいつミサイルを発射するか。アメリカやロシア、中国など、時間や空間が無くなる現実の中で我々は生きています。

そういう時代を予測して、私は選挙も変えなければならぬと思いました。選挙はこんなものだという思い込みはありませんか。政治家や政党の出す選挙の公約は固い約束で、破られたことがないと思っていますか。どなたも信用していないようですね。あんな選挙のための約束に決まっている。信じるほうがおかしい、これが日本の未成熟な政治だということ、ほんとうに政治が変わらなければ、国の軍隊を無くしてもお腹いっぱいのご飯をといてあの決意が、政治家にあるわけがないと考えていませんか。選挙の公約が破られるためにあった時代は経済成長が右肩上がり、あれもこれもできて時代でした。税金が毎年上がったので約束以上のことができたので、公約がいい加減なものになったわけです。

ところが成熟社会になり、低成長、無成長になったので、あれもこれもできる時代から、あれかこれかの時代になってしまいました。ただし、あれかこれからの順番、政策を決めるのは政治家ではなく国民のみなさんの1票によるのであれば、政治家も少しはまともな公約にしなければならないはず。まともな公約は、選挙の前に出した約束にきちんと文字や数字があり、選挙後から4年後に検証ができるような公約にしてください。マニフェストです。

約束したからこそ懸命に頑張ります。横石さんのように、何とか飯のタネをと考え抜いて、彼は葉っぱがお金になると見抜きました。約束したから葉っぱビジネスはどんどん進化しました。電話からパソコン、現在は 아이폰 になり、マイクロソフトがバックアップという進化がありました。

選挙はお願いから約束に変えたほうが良いと思います。選挙のときに約束したことをみんなが検証できて、この人は70点以上だからもう一回やってもらおうとか、約束が破られてできていなかったから落選してもらおうなど、いわゆる情実の選挙から約束の選挙に変えたほうが、あれかこれかの選択の時代は、地域が元気になるのも、国の問題もそういうことだという、みなさんに代わって議会をする代議制の民主主義が、ほんとうに確立しない限り、日本はポピュリズムで国民に代わってどんどん借金を重ねると、孫子の代にどうなるかを考えてくれませんか、マニフェストを提唱したのですが、民主党は失敗し、政権を降りました。もちろん、自民党も民主党同様、できなければ政権を降りてもらおうという厳しさが必要ですが、ただ国には難しいところがありますが、賛否を問うてやっていくという真面目な説明が必要です。政治は一方通行ではありません。反対があっても決断をしていかなければいけないわけです。そんな時代を迎えたときに、ローカルのマニフェストは今よく動いています。私は提唱者なので10数年間その仕事に携わってきましたが、今、地方の選挙はローカルマニフェストで首長候補が掲げ、それが4年間でやれたかどうかという選挙に大きく変わってきています。また、議会の先生方の選挙も同様です。

そんな過程の中で議会が非常に重要な役割であるにも係らず、政務活動費がでたらめです。ここは抜本的に変えなければなりません。富山市議会の議員は税金泥棒だけど、自分たちが選んだと富山市民は言います。そうではなくて、みんなが本気になって羽ばたけば変わるのではないかと思います。

マニフェストをこれからも続けながら、約束による選挙が変わっていけば私は思っています。私にとっての蝶々はマニフェストです。変われ、変われといっても変わらないので、マニフェストができたかどうかで点数を付けていきましょうと

いう作業に取り組んでいます。最近ネットでのマニフェストなので、ずいぶん変化しました。政治学者や行政官や政党や政治家よりも、ネットの技術者のみなさんが、デモクラシーを変えようという動きに発展し、必ず変わっていくと思っています。私も至りませんが、政治の世界に30数年もいたので、せめて蝶々としてマニフェストを飛ばしながら、政治のあり方を変えていきたいと思っています。

それぞれのご家族や会社、地域があります。それぞれの単位でどうぞ気づきの連鎖が起きるようなことをみなさん方が発想し、若い人たちに取り組んでもらってください。それが、世の中が一番変わる動機付けになると思います。地域のリーダーのロータリアンのみなさん方が真剣に考えていただければ必ず変わります。そんな小さなさざ波が広がって、あっという間に四国を覆うということです。

選挙でいえば東京都が変わりました。小池さんはどちらかというと自民党では不遇の人でした。それで都知事に立候補したわけですが、既存の体制の自民党は、自民党員が小池さんを応援したら家族まで除名だということに、都民が反撥しました。かつての都知事の石原慎太郎さんが出てきて、「厚化粧の大年間」と言うなど、圧倒的な自民党や石原さんの応援のお陰で小池さんは圧勝しました。

東京都庁や都議会がブラックボックスで、都の職員と都議会が慣れ合いで、豊洲に汚染対策のための盛土が無いのに、あると嘘を言いました。都民の代表機関は都議会ですから、それに嘘を言った都庁に明日は絶対ありません。この体質を治さなければなりません。東京都庁の職員はIQが高く、優れた人が多いのですが、官僚は自分たちが東京を大きくしたと思っているので、平気で都民に嘘をつくという、ここを修復しない限り、東京が変わらないので小池さんは行動したわけ。都議会にはドンがいるそうですが、執行権がないので普通は議会にドンはできないはず。議案

を通さなければならないと真面目な職員が考えて、議案ごとに議会に諮るのでそれを通すために、議員さんとの貸し借りができるわけです。ですから、東京都の職員たちが都議会のドンをつくったわけです。日本中、どこも似たようなもので、みなさんが知らない間に執行部と議会は慣れ合いをやっています。これでは地域は絶対に変わりません。

今までの成長社会は何をしても動きましたが、今は動きません。このままでは、ほんとうに東京だけが栄えます。何とかお宝を探して、見つけ出してください。みなさんが変わられて上勝が変わったように、民間人が議員や市長、市役所や県庁を動かさなければ、四国が東京に勝てる日は来ません。それを決意するかどうか、今、問われているのではないかを、全国のみなさんに考えていただきたいと思います。

そのための道具として、マニフェストの公約が少しは信用できるものに変えていきたいと思っています。義理と人情はよくわかりますが、お互いの慣れ合いでできた日本の政治風土を変えるのは、田舎になればなるほど大変ですが、必ず変えなければ日本は立ち上がれないことを、ロータリアンの地域のリーダーのみなさん方がしっかりと地域を引っ張り、蝶々になって広がれば、世の中が大きく変わる時期がくるのではないかと思います。

今、世界を覆っている権力は、今から250年ほど前にイギリスで起こった産業革命がもとになっています。産業革命で人間の労力が機械に変わりました。蒸気機関を発明し、それを上手に使うことで白人でキリスト教国家が世界を制覇したのが、この250年です。日本は敗戦したので、何としても工業国家にということで、それを前提に徹底的に工業社会をつくり上げてきました。これは世界一だと思っています。

戦後、あっという間に日本は先進国の仲間入りをしました。フランスで開催された第1回サミットの参加は5カ国でした。白人でキリスト教国家

以外で、黄色人種で別の宗教が多い日本が世界の先進国の仲間入りをしたのは戦後30年、我々の親たちの努力からです。このとき、東洋の奇跡と世界が驚き、日本を見直しました。

従って産業国家は工業国家ということで、例えば徳島でも工業以外の産業で明治以来新しい産業はほとんど育っていません。江戸時代は徳川に統治されており、参勤交代等で財産を没収されたため、財政維持のために地場産業を育てたので今日があるわけです。ただし、明治以降は国へ行って補助金を貰うようになったため、官官接待ばかりが盛んになりました。これが地方自治体の実情です。

裏金は公金横領ですがしかし仕方がないという文化、そうしなければ救われなかったというのは事実です。三重県もそういうことをやっていましたが、それがバレました。平成7年1月17日に新大阪駅から吉野ヶ里遺跡へ視察に行ったという県の職員がいました。阪神淡路大震災の日で、線路や鉄橋が落ちたのになぜ行けたのか。裏金でした。それが明らかになったとき、部長会議で一度ゼロから見直そうと言うと、一番の人格者で一番の実力者の部長が「それは駄目です。官官接待は無くせません」と言いました。お隣の愛知県や岐阜県も同様で、300万人の公務員が公金横領です。でもそういう不都合な真実は誰も認めががりません。どこかで断ち切らなければ駄目だというのがネットの時代で明らかになりました。裏金には大変苦勞しました。私が新任の知事だったのですが、3カ月間議論して、県庁の今までの力が勝つか、新任知事の私が勝つか、3カ月間血みどろの戦いが続きました。3カ月後、代表の部長が「私たちは使った裏金を管理職手当で返します」という報告に来ました。金額を聞くと、11億6千万円でした。その金額を自分たちの管理職手当で返すというわけです。裏金は官官接待など、止むにやまれずやったことなどで、ただ悪いとも言い難いものがあります。裏金づくりで若い職員が退職を余儀なくされた事実が、部長を動かし改革が進み、三重県は

変わりました。結果、知事や市長が自分の立場を超えて、本気で体質改善をするかどうか、蝶々になれるかどうか。現在は裏金が無くなって頑張ろうという時代がやっと来ましたが、それはまだ中途半端なので、思い切って地域からお宝を見つけ、探し、それを磨くことを民間でやっていただけたらと思います。

ただ、民主主義は何をするにも時間がかかります。我々のプライドは国と地方の関係を対等なものにするために法律や制度を変えるために一生懸命に取り組みました。機関委任事務という、国の機関で県庁に機関として委任する事務がありますが、大体80パーセントが国の下請けです。ですから、1995年の地方分権推進法以前の知事で県民のほうを見ている知事はどこにもいなかったわけです。そんなわけでその制度は全廃されましたが、20年前の知事は制度を変えるだけで精一杯でした。でもこれからは地方自らが創生していこう。創造していこう。地方創生法、町・人・仕事の創生法が出来たのは、1995年の分権推進法以来、20年ぶりにやっと変わって、地方創生の時代を迎えたことを深く理解していただきたいと思います。

ところがこれを理解していないのが中央政府です。担当大臣が、地方がいい案を持ってきたら国は採択しますから、どうぞいい案をつくってくださいと言いました。これは国が全てを採点するということです。これまでは補助金で、申請のために一生懸命に頑張ったのが市町村長や都道府県でした。地方創生になって自分たちで考えても、国が気に入らなければ採択はないわけですから、何も変わりません。ですから、現在地方創生は動いていません。高揚感がまったくありません。国に頼るのではなく、地方から本気で創生していく上勝になる以外に、四国に明日のないことを民間の方に考えていただき、ほんとうの意味での地方創生、元気になったということが今はとても重要です。激動期であり、大転換期、立ち位置を変えるときだと思います。

10数年後には、49パーセントの仕事がロボットに替わるという話で、車は自動運転になります。私の趣味の囲碁は何百年もかけてつくり上げてきた定石が最近、変わりました。ロボットが名人に勝ったからです。時間と空間が無くなったので、世界一の名人にロボットが勝ったとき、ロボットがそのときに調べた過去の囲碁の勝ち方は3千万局でした。今まで人間が考えてきた定石が引っ繰り返って大混乱です。

機械やロボット、AIが人間を超える時代が目前に迫っています。ドローンが飛び、顕微鏡が今までの500倍、1000倍に見えるようになります。こんなことを現実のものとして、不都合な真実でもそれを認め、新しい時代をつくるようになれば、教育が変わります。学校の先生が古い頭で一生懸命に教えて、勉強ができる子だけがいい子で、个性的な子は落ちこぼれになるのではなく、子どもたちは機械に使われるのではなく機械を上手に使う価値創造の教育に変わらなければならないので、偏差値教育から個性豊かな教育に変わらざるを得ない、教育基本法が変わります。宗教や法律も変わります。全てが入れ替わるほどの大変革の時代に、みなさん方にはぜひ、四国の蝶々になっていただきたいと思います。

改革は人を変えることではなく、自分が変わることです。自分が変わると周囲が変わります。みなさんが蝶々になったとき、時代は必ず転換するはずですが、こういう関係が県庁や市役所と民間のみなさんとの関係になれば、ほんとうに変わることを、誰かが本気で決意すればみんなが横石さんになれる。

マニフェストの普及と、どこかの地域で蝶々として舞っていただくことを念願して、私のお話にさせていただきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。